

# グレアム・グリーンの小説について

宮 井 敏

ロンドン。エーストン街の近く、とある酒場で一人の女がジンを飲んでゐる。ケイトは三十三才、美貌で冷静且有能。ストックホルムに住む国際的な実業家の秘書をして居り、定跡通り結婚を望まれている。失業ばかりしている、人好きはするが狡い、虚栄心の強い双生児の弟アントニイを、北欧の都会へ連れ戻る為に待つてゐるのだ。

「ジンをもう一つ」

グラスを廻し乍ら彼女は考える。家中の困り者、定職に付けず、世界を転々として、便りと言へば「辞職した」の電報許り、——その為に父親の死期を早めたやうな弟。一寸したインチキや見え透いた嘘、自分以上のものに見せかけようとする空しい努力。あの子は一生、虚栄心の悲しい犠牲で畢るだろう。

と言つて彼女は、どうして弟から脱し得よう。ケイトが味つた苦痛と言へば、アントニイを通じてだけであり、絶望も、恥も、恐怖も、みんなそうだった。彼は彼女にとつて弟以上のものであり、同時に又成功以外のすべてであつた。しかも姉としての愛情からと言うよりは、殆んど自分自身の分身に対する incestuous な感情から、ケイトはア

ントニイが身近にいない事に絶えず不満を感じて来たのだつた。——上海、バンコック、アデン——今度こそストックホルムで一緒に暮さう。ボスである実業家も、適當な職を見付けてくれるだろう。

× × ×

こうして、グリーンの描く特有の世界——つまり、バーテンやウェイトレスがジロ／＼流し目をくれる薄汚ないレストランや、禿鷹が腐肉をあさつて飛び廻る南阿の植民地の殺風景な警察署、独軍のVII空襲の夜のロンドン、或は逃亡者がかくまわれた開拓地の納屋と言つた様な、何か胃の腑を緊付けられる様な不安と焦燥、気倦い物憂さや、空虚な寂寞を感じさせる雰囲気——は始まつて行く。

此の、一九三五年に書かれた「イギリスが私を作つた」*England Made Me* は、彼が意識して区別した「娯楽物」(entertainment)ではない、言わば serious な作品としては「内面の男」*A Man Within* 及び「此が戦場だ」*It's a Battlefield* に続く第三作であり、その後の「権力と栄光」*The Power and the Glory*、「事件の核心」*The Heart of the Matter* 或は「情事の果つ」*The End of the Affair*

と共に、一応グリーンンの傑作と見做されようが、こうした言わばありふれた平凡な情景の中で、目立たない気の小さい凡人達を登場させて、吾々の住む街の横町にもある様な道德的な悪を追求して行く点で、これ等の作品は構成上似通っている。

アントニーは、ケイトと共にストックホルムに行き、実業家の秘書の様な護衛の様な仕事を与えられる。通つた事もないハロウ・スクールのネクタイを締めたり、子供の頃、兎の皮を剥ぐ時に怪我した眼の下の傷をもとに武勇伝を一席やつたり、相変らずインチキとホラに終始するが、この新しい社会的地位には満足している。と言つて、彼が持つているさゝやかな良心と、全く妥協して了つたわけではなく、謂わば善悪何れを取るかを決め兼ねた状態にある。氣取りや見栄に終始し乍らも、意外に古臭い彼の考え方が、例えば「ちゃんとした女の子はお酒を飲むもんじやない」とか、「いくら出鱈目をやろうと勝手だが、友達に妹には手を出しちや不可なり」と言つた一時代古い妙な既成の道德を頑固に信ずる心が、彼をまづしぐらに悪の世界に突き進んで行くのを止めている。一方ミンティは、アントニーとケイトのボスである実業家の身辺動靜をリポートする係の新聞記者で、そんな關係からアントニーと友達になるが、違ふ所は、彼が本當の意味の持つて余され者ではなく、確にハロウ・スクールを出た「地道にやつている」男であり、アントニーに較べてさつぱり風采の上らぬ薄汚ない、大してスクープも抜けぬ無能な記者である。従つて彼は孤独であり、イギリスの生家とも殆んど連絡がなく、みすばらしい身なりでひつそりと安アパートに住んでいる。生活の慰めと言へば、彼が勝手に作つた守護神 Holy Cunt と、冷ましたお茶を飲むむ位のものである。故国を遠く離れて暮す落魄の想いや、体力的なひけ目、記者としての無能さ

や、同窓生であり乍らイギリス大使の冷淡な仕打、そうしたものが彼の劣等感となつて、彼を惨めな氣持に追込んでゐるのである。が彼は殆んど完全に善い男である。敢て自己を主張する事もなく、他人に対して積極的に惡意を抱く事もない。寧ろ惡に対して痛々しいまでの直感力を持つた男である。

アントニーは実業家の護衛として持前の小器用さで何とか勤めて行くが、一代で巨万の富をなした男に有勝ちな様にその依頼には可成りいかゞしい事もある。遂に、ストライキ騒ぎでくびになつたリーダーの息子が会見を要求した時、追い帰せという命令に逆らつて彼は抗議する。弱いがしかしはつきりと、之は紳士としてやるべき事ではないと言ふ。実業家は顔色には出さないが立腹し、加えてケイトのアントニーに対する心遣いを快く思つて居ない所から、尙更感情的に喰違つて了う。

正規の教養がなく、その為に社交にも觀劇にも絶えずひけ目を感じている男、宏壯なビルの中庭に新進の彫刻家に噴水の像を造らせてもその理解に限界がある事を否応なしに覺らされてゐる男、しかも彼の生涯は冷酷な数字との戦いに終始して來た。巨大な經濟機構を支配して、今日もワルソーからパリからベルリンから株価の上一下を打電して來る——さうした男に、身辺に冷たい批判の眼が絶えず動いてゐる事がどうして我慢出來よう。実業家にとつて、アントニーのちつぽけな良心など、且て彼が踏みにじつて來た無數の人間の些やかな善意以下のものではなかつた。何故なら、彼が信ずるものは力關係に於ける勝利のみであつたから。

そして或晩、アントニーがストックホルムを去つて、偽善と不正に充ちてはゐるが、あの懐しいロンドンへ歸ろうとした晩、スカンディ

ナヴィア特有の濃霧の中で彼は地上から消されて了う。ミンティは他殺である事に気付いて、実業家にそれとなく匂わせるが、どうする事も出来ない。一方実業家とケイトの結婚式は進行し、ケイトの「私達は泥棒よ、あつちこつちで生活を盗んで来ちゃ、何にも返さないんだから」(p. 274)という言葉で終っている。

グリーンは子供の頃、ライダー・ヘガードの「ソロモン王の宝窟」の話を讀んで、其処に出て来る人物が、アフリカ奥地のガイド、アラン・コーターメンにしろ、行方不明の夫を探して藩地の冒険旅行に出るエリザベス・カーティスや、その兄ジョン・グッドにしろ、彼等が余りに善良で悪意を持たない為に真実と思われず、只ソロモンの宝庫を守るカルナア族の魔女ガゴールのみが彼の心を捉え、長い間彼の夢に出没して絶望の象徴となつたと言うが、(The Lost Childhood & other Essays, p. 15) (この話は「事件の核心」にも出て来る) 感受性の強い子供の目に映じたものは、甘美な未来よりは世の悪であり、信仰よりは罪の意識であり、天国よりは地獄であつた。「権力と栄光」の中で、グリーンは逃亡する牧師と信仰厚い家庭の挿話と対照させて話をすゝめているが、母親が読むジュリアンの殉教の話に反撥する少年の姿は、その儘グリーン少年期の姿であつたらう。少年ルイスは目を輝かして甘美な信仰の話に聞入っている姉妹の傍で、退屈そうに欠伸を漆喰壁に押付けてかみ殺し乍ら言うのだつた。

「何だつて終りはあるサ」と。(p. 26)

事実グリーンにとつて絶対的な究極の意味に於ける善悪の概念は、「正邪が単に社会的な作法の問題であり、伝統的な掟の問題でしかないのに対して、個々の魂が自ら撰択しなければならぬ戦慄すべき究極の問題」であつた。併も一層重要な事は、その「善」なるものが「悪」

に比べて如何に消極的であり、無抵抗なものであるかと言う事であつた。「善が人間の肉体に具体化されたのは唯一度だけであつて、この様な事は再び起るまい。しかし悪は常にそこに故郷を見出す」(The Lost Childhood, p. 16)と言う彼は、人間性を「黒と白ではなく、黒と灰色とに見ている」のである。悪の及び難い力を認める事、現代の苦悩の共通底辺を罪の意識に求め、人間の犯す罪を「地上の生活の共通の風土である」(Time, 1951, Oct. 29th, p. 42)と見る事から始まつている。岸田国士は「善魔」の中で、余りに消極的で自分を守る事丈で精一杯な「善」に、「悪」のもつしぶとさ、たくらみ、闘志或は積極的な行動性を与えて、謂わば魔性の善を描こうとしたが、(創元文庫「善魔」二四頁) グリーンの場合、その善の力は誠に弱く臍甲斐のない二人の人物アントニイとミンティによつて代表されはしたが、脆くも敗北に終つて了つたわけである。

主題は同じ係列を引いて、より明らかな悪そのものへと進んで行く。「権力と栄光」がそれである。一九三〇年頃、メキシコでは、革命につぐ革命で古い制度は破壊され、カトリック教会も国禁となり、牧師は国外に追放されて了う。唯一人残された牧師が官憲に追跡されて逃亡の途中、様々な事件を捲起し乍ら遂に州境を越えて安全地帯に入るが、一片の宗教的良心の為に再び密入国し、拳句の果、捕えられて銃殺される、と言つた話であるが、追われる者のいたゞまれない焦燥感や、足下から襲つて来る敗北感が主調となつており、「問みはせばめられ、獵犬と死との鋭い力は刻々に迫つて来た」(The Power and the Glory, p. 3)と言う感じが全篇に漲つている。

その昔、まだメキシコ地方に平和が続いていた頃、牧師は親しみと尊敬との息の詰まる様な雰囲気の中で、罪のない女性的な冗談を飛ば

し乍ら自分の世界に安住していた。人々が払う敬意、安全な暮し、陳腐な宗教特有の言葉、事を楽に運ぶための冗談、厚かましく他人の服従を受け入れる事、そうした物の上に唯あぐらをかいていればよかつた。カソリックの神父のカラをつけ、ムクムク太つて、出目で、鬚は綺麗に剃つて丁寧のパウダーをつけ、柔い勿体振つた横柄な手をしてゐた。彼は自分の顔が生れつきの儘では道化の顔であり、女達にとつて軽い笑いの種としては丁度良いだらうが、聖壇には不向きな事をよく知つてゐた。それは卑屈の像であつた。彼にとつて人生のさゝやかな幸福は少し許り早く来過ぎた訳だつた。多くのものを恐れ、貧乏を罪惡の様に憎んでゐた子供の頃、牧師になつたら、金に不自由せず得意だらうと漠然と考へてゐた彼が今日迄何をして来ただらうか。五年前被局がやつて来る迄、彼が牧師としてした事は、祓禊式で説教をしたり、信徒の組合を組織したり、格子のはまつた窓の中で中年の淑女達とお茶を飲んだり、新しい家を香で祝福したりする事だけであつた。罪惡も、貧乏も、そして天国もその頃には暖炉の前で氣遣つた宿なし犬の事程にも縁遠いものでしかなかつた。

今や彼はボロを纏い、素足同然で驃馬に乗り、森を、沼地を、開拓地を逃げ廻つてゐた。聖壇石すら彼は持つてゐなかつた。それは丁度、密使が持つ信任状の様に、(Confidential Agent, Penguin Books, p. 35)曾ては彼の天職の象徴であつた筈だつた。いじけた威厳の様なものが身につけてはいたけれ共、黒い服と撫で肩とは棺桶を思ひ出させ僅に生存の端つこに生きてゐるだけだつた。去年の枯葉のように固い手は永続性の見本の様であつた。何ももの大して彼を変える事は出来なかつたらう。彼の顔はもはや無宿者の顔であつた。教会に対する弾圧が始り、牧師の或者は国外に亡命し、或者は捉えられて銃殺され、

そして或者はホセ神父の様に信仰を捨て、妻帯して住みついたら共彼は従容として使徒条令を唱えて獄死するでもなく、さりとて政府側と妥協する事もしようとはしなかつた。勿論逃亡する機会は幾らでもあつたし、彼自身も出来れば現在の雰囲気から脱出したかつたのだが何ものか、そうさせなかつたのだ。

勿論、彼は自分が不良牧師だと言う事をよく知つてゐた。世間の人が *whisky priest* と呼んでいる事も、自分が惡魔の奇妙な下僕であらう事も知つてゐた。が運命に対する無抵抗な諦めの様なものが彼を脱出する事から妨げてゐた。逃亡する事自体に、追われる者の焦燥感に、疲れて了つて自ら進んで警官に捕縛されようとなしたり、人々が罪を張つて待ち構へてゐるアメリカ人の殺人犯の身の上を羨んで、迷信的な恐怖から牧師である彼を密告しようとしなない村の人々を寧ろ恨んだりする彼ではあるが、素朴な信仰を今なお、国禁を犯して迄抱き続ける人々の切なる願を彼はどうしても斥ける事は出来なかつたのである。一度彼が船でヴェラ・クルスへ脱れようとした時は、土民の子供に危篤の母親を救つて呉れと頼まれて、出帆を前にして、その子と母親とを惜み乍らもロバでトボトボ引返して行く。疲れ果て、身すばらしい開拓地の部落に着いた時も、人々は彼を眠らさないで五年間溜つた讒悔を聞いて呉れと頼み込む。腹立ち紛れに「宜しい。さあ始めた。わしはあんた達の下僕なんだから」と言い乍ら彼は泣くのだつた。そして最後の時も既に州境を越えて安全地帯に入り乍ら、アメリカ人の殺人犯がもたらした「後生だから神父さん………」と書いた紙切れの為に、これが最後だという予感にさいなまれ乍らも再び引返して行く彼であつた。不良牧師の彼が行う讒悔の聴聞や弥撒が何の爲にならう。しかも彼は儀式に不可欠の聖壇石すら持つてゐなかつた。

一方、彼が部落の女に産ませた私生児への父親としての止み難い愛情が、よし彼が自らの罪を悔いているにせよ、駄目にしてう。罪の結果を愛する事は罪に対する懺悔を無効にするだけの事であつた。

が彼は知つていた。彼が一つの部落を去つて逃避行を続ける限り、その部落の人々は確に安全ではあらうけれども、少くとも彼が存在する以上、人々は彼の見苦しい例に倣わなくても済むだらうし、信仰か或は正確にその逆のものが身近に未だある事を知らう。彼は子供達が思ひ出す事の出来る唯一人の牧師であつたし、彼等が信仰を受取つたのも、もとはといえば彼からであつた。彼は知つていた、もし彼が永遠に去つて了つたら、海と山とに挾つたこの土地に、沼地許りの荒れ果てたこの開拓地に、どんな形にもせよはや神が存在しなくなるだらう事を。部落の人々が彼を軽蔑しても、彼に倣つて彼等が墮落しても、彼の為に彼等が殺されても、此処にとまらる事が或は彼に残された僅かな義務ではなからうか、と言う事を。

彼は既に姦淫の罪を犯し、飲酒の罪を犯していた。祭日と断食日と禁欲日とはとうに捨て、了つていた。日常の生活は堰の様にひゞ割れてそこから忘却が一滴づつ滲み込んで、沢山の戒律や、聖務日課を拭いて了つたが、栄養の足りたつやの好い顔をした牧師が語る以上に貧困を知りつゝ、逆の方法にもせよ信仰を認めていた、今や彼の頭は簡易化された神話で一杯だつた。——甲冑をつけた天使長ミカエルが竜を殺し、「天使達は、美しい髪をなびかせ乍ら、彗星の様に落ちた。天使達が、神が人間に与えようとしたもの、生と言う、地上生活と言う広大な特権を嫉妬したからだつた」(p. 36)——本もなく、教育ある人との接触もない生活は、彼の記憶から一切のものを剝ぎ取つて、たゞ最も単純な神秘的輪郭のみを残した。天国と地獄との単純な觀念

のみが彼の頭の中で動いていた。

彼の抱いたものは、余りに地上の愛であり、余りに素朴な信仰の姿であり過ぎたかも知れない。それは恐らく *It was of earth, earthly.* と言つて地上の物を神の嘉し給う処ならずと斥けた中世の高僧達の受け容るゝ処とは到底ならぬであらうが (G. G. Coulton: *Medieval Paganism*, p. 113) 其処に描かれたものは、より原始の人間の心理であり、殆ど中世以前の信仰の形であつたらう。古代人が抱いた空間恐怖 *space shyness* の様な、素朴な原始の宗教観であつたのだ。エリオットは言う、「ボードレールの悪魔主義は単に見栄でない限り、裏口からキリスト教へ入ろうとする企てであつた。言葉の上許りでなく精神に於ける純粹な演神は、或面では信仰の産物であり、完全なクリスチャンにとつてあり得ないのと同じく、全くの無神論者にもあり得ない事である。それは信仰を肯定する一つのやり方である」(T. S. Eliot: *Baudelaire*, Chap. I, p. 369) と。グリーンが「既成のイデオロギーやフェイイスを解説する様な作品を書く事によつて、二流の哲学者や神学者に成り下る事をはつきりと拒絶している」(*The Lost Childhood*, p. 38) 以上、彼はボードレールがした様に、自分獨りでキリスト教を発見し、それを流行や社会的政治的理由と見做さないうで、謂わば最初から始めているのである。決して逆説的な言い方ではなく、神を身近に感ずる事は、自らの原罪感に打のめされる事は精密で巧緻ではあらうけれども、余りに觀念的な教会の教義や牧師の説教には、それ程屢々見出されない事ではなからうか。そうして究極の点迄押進める時、果して *Original Sin* と言ふ *faith* と言ふ、一体何であらうか。罪の意識に迫り苛なまれ、追ひ詰められようとしている者の、足下から吹き上げて来る目も眩む様な敗北感と、些細な行為

が積り積つて形造る動かし難い劣等感とに打挫しがれ、他人からみればとるに足らぬ責任感と義務感との中にあつて、完全は望むべくもなく、無私に徹する事は思いもよらず、止み難い愛欲の念に苦しめられ乍ら、しかも明日の日を翹望する心、——それは、淋しい諦観と、依姑地な自己に對する苦い自嘲とを交り合せた、人間の不完全さそのものに直面した、最も素朴な形の原罪感ではなからうか。T・E・ヒュームは言つてゐる。「倫理的価値は人間の欲望や感情に對して、相對的なものではなく、絶對的な客觀的なものである」と。そして、「こうした絶對的な価値に照してゐる時、人間はそれ自身、本質的に不完全であり、限界をもたされてゐる、と言えよう。人は時として完全さを持つ行為を成しとげるかも知れないけれども、人間自身が完全になる事は決してない。社会に於ける人間の日常行為に關しての或第二義的な結果は實に此処から生れる。つまり人間は本質的に惡である」(Speculations, A programme)と。ヒュームが考へた世界觀は、實は何の連絡もない個々別々の現實の世界を、誤れるカテゴリーに依つて一應の統一感を与えて人間に大いなる可能性を認めようと言ふルネッサンス以來のヒューマニズムの生んだ大きなズレを是正すべく、先づリアリティ相互の間に越え難いギャップがある事を認め、之を幾何や物理の無機の世界と、倫理、宗教の世界、及びその間に横わる心理や歴史の有機の世界とに分ち、前二者のみが客觀的な絶對的な価値を有するものであり、有機の世界は混沌と泥濘の地帯であるとみたのであり、無機と有機の世界を混同させる事は、一つの生命現象を機械的な轉換とみる様な、精神と物質との間に深淵を無視してうへ傾向を生み、惹いては、有機の世界と倫理的絶對価値の世界との境界を混乱させる事となつた、と言ふのである。言い換えれば、mechanismの世界と、倫理

的絶對価値の世界の間に、人間の住む vitalism の世界があり、各々の間には越え難い溝があると云うのであつて、絶對価値の世界は、「生命」や「進歩」等と言ふ言葉で言い表わされ得べくもない峻厳な堅確さと永久性のあるものであるとヒュームは考へる。(cf. Speculations, A Method)人間が自らの不完全さに面と向き合う時、つまり絶對価値の世界を遙かに望み乍らも深淵の縁に佇んで自己の能力の限界をかみしめてゐる時、始めて倫理的な「善」と「惡」との意義を知ると言えよう。現代の苦惱と言ひ、追ひ詰められた者の焦燥感といひ問題は實に此処から出発する。

「救世に亘る思考作用が、我々をどの様な不幸に、又どの様な滅亡の危機に陥し入れたかを考へる時、人は時として、出来るならば我々が何処から出発したかを知り、どの点から我々が道を間違へたのかを思い出したくなる」(Journey Without Maps, Introduction)と言ふグリーンの場合、人間の世界が一つの文学の對象となり得ると言ふ事とは別に、追ひ詰められた人間が、自分の出発点であつた筈の、この人間の世界に再び立ち戻つてくるという所に根本の方法があるわけであり、その場合、彼にとつてカトリック思想は、(よじそれが、混乱の際、信頼に耐え得る強固なドクトリンを持つかに見えるために、虚無にも社会改革にも走らない場合の、謂わば必然の結果であるにせよ)彼の鋭い人間精神探求のための一つの仮説であるとみる事は不可能であらうか。問題は人間性に潜む惡であり、罪の意識であり、置き換えれば、「人間が人間である事の為に感ずるデレンマ」である以上、彼の説く神が教会の神と同一である事は必ずしも必要な事ではなからうし、又、謂わば limbo である我々が、(cf. T.S. Eliot. Dante :

(以下六六頁につづく)

- 25 *Janet's Repentance of Scenes of Clerical Life* (Everyman's L.), P. 251
- 26 *Adam Bede* (A.L. Burt), P. 368
- 27 *Ibid.* (Everyman's L.), P. 350
- 28 L. Cazamian, 「近代英國」(創元社), P. 182
- 29 *Adam Bede* (Burt), P. 492
- 30 *Ibid.*, P. 334
- 31 *Mill on the Floss*, P. 512
- 32 *Ibid.*, P. 458
- 33 *Janet's Repentance in Scenes of Clerical Life*, P. 250
- 34 *Ibid.*, P. 250
- 35 D. Cecil, *op. cit.*, P. 245
- 36 *Janet's Repentance*, P. 253
- 37 F.H. Mair, *Modern English Literature* (London; Oxford, 1951) Home Univ. L. P. 193
- 38 Brimley Johnson, *The Women Novelists* (W. Collins & Sono), P. 212
- 39 Edward Dowden, *Studies in Literature 1789—1877*

- (London; Kegan Paul 1909) 10th imp. P. 241
- 40 G.K. Chesterton, *The Victorian Age in Literature* (Oxford, 1947) Home Univ. L. P. 67
- 41 O. Browning, *Life of George Eliot* (London; Water Scott, 1890), P. 86
- 42 O. Elton, *A Survey of English Literature 1830—1880*, (London; Edward Arnold 1920), Vol. II, P. 260

(三十三頁以下)

*The Purgatorio and the "Paradiso"*, *Selected Essays*, p. 242) 伝統の基盤の上に立つ彼のカンリツ的な宗教感覚を或程度に想像する事しか出来なうと云ふ止むを得ぬ事はなからうか。要は社会的な約束でしかなく right or wrong の問題ではなくして、個々の魂が撰択に直面せしめられてゐる人間の本質的な good or evil の問題であるからである。同じ主題は植民地の警官(事件の核心)や、小説家と人妻(情事の果て)と云ふより一般的なブルジョア展開されて行く。

(未完)